

## アトランタ便り

岡田 潔

大きな森の中に、大都會がすっぱりと入りこんだ感じのミニアトランタは、町中をリスが駆け回り、公園や家の庭先に野兔が顔を出したりします。「風と共に去りぬ」の舞台として知られ、今では、次のオリンピック開催地としても広く知られるようになって来ました。ロスアンゼルスとの暴動騒ぎの時にはアトランタにも飛び火し、ちよつとした騒ぎがありましたが、南部独特のサザンホスピタリティと呼ばれる、人情味の濃い、あたたかく親切な人柄の住みやすい町です。

聖学院アトランタ国際学校は、当地の名門オグレスロープ大学（学生数はわずか千二百名程ですが、キャンパスは早稲田の戸塚キャンパスの四倍くらいです）構内の元小学校の校舎を借用して、三年前、日本語による日本の教育課程を基本とした全日制の小学校・幼稚園として教育活動を始めました。開校当初一七名だった生徒数もようやく七〇名となり、来春には中学部（アメリカでは七年生）を開設する運びとなりました。

日本の教育課程を基本とする全日制の学校ですが、「国際学校」という名称通り、単なる日本人学校ではなく、新しい国際社会に生きる真の国際人の育成のための教育と、日常生活を英語で過し

ている子供たちに対する日本語教育が大きな比重を持って来ます。国際結婚その他で片方が日本人の家庭、日本語と日本の教育を受けさせたいと願う両親米国人の家庭、両親日本人でも永住者で、子供は日本の学校はもちろん、日本人の友達にもほとんど接することがなかった者など、さまざま異なる条件を背負った子供たちで日本語教室はにぎわっています。しかし、なんといつてもそうした子供たちにとっては、大多数の日本企業派遣の子供たちとの生活・遊びを通して身につけるものが多く、校内では日本語と英語が飛びかっています。

この地でも近年日本語学習熱はかなり高まって来ています。市内の主要な大学、エモリー大学、ジョージア州立大学、ジョージア工科大学などには日本語クラスがあり、教師も日本の大学を終えて、アメリカで言語学系統の大学院、あるいは語学教師としての特別の訓練を受けた人が担当しています。オグレスロープ大学ではアジア研究の一環として日本語講座が置かれ岡田紫（36教育・国文卒、長沼日本語教師長期養生講座）が担当しておりますが、三ヶ月で簡単な会話、ひらがなの読み書きができる程度にまではなっています。しかし、一歩教室を出ると日本語に触れる機会がほとんど無いこと、また、彼等にとっては日本語の音韻は全く初めて接するものであることなど、初級者の学習にはかなりの苦労があるようです。

大学だけでなく、JETROでも日本語講座を開いているほか、公立の高等学校、カウンティ（郡、米国では郡の教育委員会によってカリキュラムが異なる場合が多い）によっては小学校でも

選択として日本語のクラスが置かれている所もあります。しかし、この場合は教室の質にかなり程度の差があり、たまたま教室を見学したり、日本語教師の集まりに出て話しをしたりする折など、当然のことですが、日本語ができるということと、日本語を外国で外国人に教えることが出来るということとは別の次元のことであると痛感させられることがよくあります。

「日本語を話そう会」という会があります。地元新聞の論説委員で日本語に堪能な方が中心で月に一回集まり飲み物持参で語り合う会です。大学生、会社員、主婦などアメリカ人だけではなく韓国、中国人の人も集まり日本語で会話を楽しみながら学ぼうという会です。縁あってお手伝いをしてますが、肝心の日本人があまり集まりません。とくに企業関係の人は、そんな所で日本語で話しても何の得にもならないというわけです。本当の国際理解の第一歩となるたいせつな機会だと私は考えているのですが。

(聖学院アトランタ国際学校)

\* \* \*

テネシー便り

橋本結花

教室に入ると、生徒達はいつにない神妙な顔で席についている。見ると、教室の後ろに数名のアメリカ人小学生とその引率の先生

方の期待に満ちた目があった。テネシー明治学院高等部(TMG)では、時々こんな形の地域交流も行われる。

見学者がある日は授業が弾む。日頃校内と寮内の限られた人間としか接することが出来ない生徒らは、俄かに活気付く。覗かれた漢字テストについて説明を始める得意気な顔。授業中の発言も活発になる。もちろん、国語の授業の内容は見学者には全く分からないのだが、「日本の高校の授業形態」に満足して帰っていかれる。

TMGは在外子弟に日本の高等学校教育を行う目的で、一九八九年に設立された。アメリカ南部の大自然の中、広大な五十五万<sup>m</sup>を敷地に持つ、けれども小さな学校である。

生徒数百二十六名(内、日本からの留学生七十九名、在外生四十二名)、全八クラス、一クラス十四名から十七名という少人数教育が行われている。カリキュラムは文部省の学習指導要領に基づき、英語・体育・芸術の一部の時間を除いては日本人教師による授業である。生徒のバックグラウンドは様々で、その国語の能力にも差があるが、日本からの生徒が半数以上を占め、存外生も日本人学校の卒業生や海外生活が短い者が多いので、授業はほぼ日本と同じ形態で行える。が、国語力の弱い生徒にも対応するため、教科書は第一学習社の新国語を採択した。早めに教科書を終わらせ、他の文章を読ませたいという思いもある。また、目から耳から無意識に入る日本語の情報が激減するので、漢字のテストや国語常識・参考資料のプリントは意識的に多く与えるようにしている。

また、逆に、与えられる日本語の情報が限られることで、生徒達が日本語に対して意識的・積極的になるということは、一つのメリットではないかと思う。例えば、彼らの図書館の利用率は大変高い。TMG図書館は一万五千冊を超える蔵書数を誇り、新聞の衛星版や種々の雑誌も備える。彼らは新聞雑誌の新しい情報（スポーツ・音楽が中心のようでもあるが）を貪り読み、新着図書を楽しみにしている。昨年度の図書部の調査では生徒の一月平均読書冊数が3・4冊と、全国平均の1・4冊を大きく上回っていた。

ところで、日本の大学への進学希望者が大部分を占める本校では、塾や予備校に通えない生徒のために、夕食後の補習（主に指名による授業補習）・補講（希望者のための上級者指導）を行っている。朝八時から勤務している教員にとってはかなりきつい仕事になるが、子供達の動機付けに（少しは）役立っていると思う。何はともあれ、「国語教育」を考えるかぎり、海外においてそれを行うことはデメリットが多い。教師自身、英語に取り囲まれ限られた日本人と接する狭い環境の中で「日本語が崩れていく」感覚に愕然とすることがある。先日、職員室での雑談中「鬼の首をとった」を「親の首をとった」と間違えて大笑いになったが、心底笑えないものがあつた。ただの言い間違いでも、小さなストレスとなつて心に残り、やがて重たい不安となる。「言葉を抱う仕事をするのは苦しい。自分の（言語）生活のすべてに職業意識が顔を出すからね。」とは、外国人に日本語を教えるある先輩の言葉だが、今、その言葉の意味を痛感する。

自分の仕事を振り返ると、日々の生活指導や雑務に追われ、それに何より実力不足で、問題の整理も対応も出来ない。現状報告と弱輩の嘆きにとどまることをお許しいただきたい。  
(テネシー明治学院)

#### 第四集（一九八四年六月）目次

国語教育のめざすもの……………中村 献作  
——小説教材の扱い方——

読書感想文の指導と実践……………池部 幸明

——漱石の「こころ」を教材として——

体系的な漢字指導の一試案……………内藤 哲彦

古典の授業で何を教えるか……………長野 和範

——生徒の実態に即して——

随想風に……………山本 昌弘

#### 第五集（一九八五年六月）目次

高校生の性意識と「伊勢物語」……………森 本真幸

楽しい古典の授業への試行錯誤……………村井 朱夏

生き方を育てる読みの授業……………田島 伸夫

——夏目漱石「坊ちゃん」の場合——

「羅生門」における二つの語……………古井 純士

——〈死人〉と〈死骸〉について——